

〔書評〕

外村彰著

『岡本かの子 短歌と小説——主我と没我と——』

渡邊 浩 史

本書『岡本かの子 短歌と小説——主我と没我と——』は、外村彰氏が先行書である『岡本かの子の小説（ひたごころ）の形象』（おうふう、二〇〇五年九月）とともに、二〇〇九年に立命館大学に提出した学位請求論文をもとにまとめられたものである。本書には、その後に口頭発表を活性化した論文も加えられている。本書の「書後」において「わたしの「研究」の立場は、何らかのコードに事例をあてはめてゆく方法論に拠らない。研究方法の基盤はあくまで実証にある」と述べられているように、これまでも著者は、徹底した実証主義の立場から文学研究を行ってきた。

このような実証主義の立場を掲げる著者によってまとめられた本書には、岡本かの子の短歌、小説に関して徹底的に調査・考察された論考が収録されている。しかも、小説をめぐる研究論文を中心にまとめられた前書よりも一層、かの子文学の世界が拡がったことは確かだ。特に「かの子文学の特質」について、「独自の

仏教観をバックボーンとして、人間生命の様相を表現するところにある」と指摘し、「肯定的に自我を覗いた短歌、ある対象に執着する一途な人物を描く小説」と分析した「書後」の言葉からは、かの子文学に対して深く精通する著者の鋭い批評眼が見て取れる。「書後」ではさらに「短歌は強い自我意識の表出、小説は没我（脱自我）を契機とする意識変容を焦点としている。副題の「主我と没我と」は、短歌を「主我」、小説を「没我」という鍵語で示し、それらからかの子文学の世界を把握しようとした」と述べている箇所があり、そこを補助線にして読み進めていけば、本書の「ねらい」が一層詳しく見えてきて分かりやすい。

では、このような「ねらい」を定めた本書の概要および構成を、以下に記した目次によって確認しておこう。

第一篇 短歌

短歌論・序説——自己表現に執した誠直な歌ひと——
前期短歌の内面表出——『かるきねたみ』から『愛のなや

みへ——

『俗身』の自意識像——「われ」と「おのづから」の交感——

『俗身』にみる自責と自己愛——石川啄木を合わせ鏡として

『わが最終歌集』と『深見草』の位置——歌風の変遷と貫流するもの——

母から子への歌——『浴身』以降——

『母子叙情』の短歌

晶子とかの子——晩年の歌から——

第二篇 小説

『過去世』「家霊」——〈家〉を継ぐ女性——

『老妓抄』——発明と家出の意味するもの——

『鮎』——「時」を超える母の鮎——

『生々流転』——「水の性」の在処——

「女性開頭」ほか「遺作」考——モチーフの所在、一平加筆の可能性——

第三篇 補説

「鶴は病みき」「巴里祭」「鮎」「やがて五月に」——小論四篇——

かの子文学と〈京都〉——旅の所産と古典受容から——

岡本かの子の人物印象

岡本かの子略年譜

書後

先程も指摘したが、本書に収録された全論考は、徹底した実証

研究によって裏付けられている。特に短歌に関しては、八本の論考を配置し、本書全体においてもその重量感は際立っていると云えるだろう。勿論、これは前書が小説中心だったことが大きく関係している。だが、本書の更なる特徴は、短歌や小説を論じる章立てだけではない。そこには、評伝研究的な側面をもつ第三篇の補説と「岡本かの子略年譜」の存在がある。このような章立てで構成された目次を見ていくと、改めて本書がいかに綿密な構成によって丁寧に編まれているのが伝わってくる。また、今後は前書と本書を併せた改訂版を刊行する企画があるとのこと。本書の「書後」にはその内容案が掲げられており、既に次を見据えた著者の構想力には、ただただ唖らされるばかりである。

では、ここからは本書の内容に関して、思いつくままに私見を述べてゆきたい。

まずは「第一篇 短歌」である。最初の「短歌論・序説」は、かの子の歌人としての人生を検討していくなかで、かの子がどのようなに短歌と関わっていったのが論じられている。この章では「芸術による自己表現をまっとうするために」「短歌の形をとるだけでは満足できない」いかの子の姿を浮き彫りにし、それが「強い芸術家意識をもち、自己表現の器を短歌に求めながらも、そこに盛り切れない人間性を小説の形式に取り入れようとしたり」かの子の文学観であることを指摘する。かの子は短歌や小説を通して「高い美の世界への憧れ」を描き、「時代の思潮や現実との格闘を

描くよりは、自己という得体の知れないものを貪欲に、芸術の器に表現させようとする道を「選択したようだ。そのような子にとつて、「短歌は、生涯にわたつて人間・かの子の心を象徴的に写す鏡のようなものであった」と著者は述べている。

次章からは、具体的な歌集を取り上げての分析に入っていく。著者は「岡本かの子の歌風」について、「明星」参加に始まり、結婚後の精神的危機に直面した大正前半「までを「前期」とし、「仏教信仰による生命認識を得た大正後半から歿年までが後期」であると規定した。そして、「鍵語」である「自我」をもとにかの子の短歌の検討を試みていく。まず「前期短歌の内面表出」の章では、第一歌集『かろきねたみ』と第二歌集『愛のなやみ』の「表現上の特徴」を分析し、「内面表出の主調に異なつた傾向」を見出した。その中で検討の対象として着目されたのが、「君」をめぐる視点の差異性である。考察の過程で著者は「『美』い」「君」への恋情が『かろきねたみ』では「優越者の態度」で表現されていたのに対し、『愛のなやみ』では「自己を「なやまし」くさせる存在となつて詠み手に意識されている」く視点を明らかにする。続く「『浴身』の自意識像」の章では、第三歌集の『浴身』に自称語が突出して多いことを見出し、その「対概念」として照応するものは何であらうか」という疑問のもとに考察を行つていく。ここでの分析の手がかりとして、著者は「おのづから」という表現に着目する。分析の過程で導き出された結論は、自称語が頻出する『浴身』の「ヴィジョン」には「対概念」として

の自然「生命」の実相との融合を求めようとする自意識の介在が認められ」というものであった。また、この『浴身』には「数多くの厳しい自責の表現が見受けられる」としているが、そうした側面については続く『『浴身』にみる自責と自己愛』の章で、石川啄木の「自責の歌」との比較を通して検討されていく。考察の過程で「作歌態度に共通性を認めること」ができるとし、その両者の歌の「共通性」を「内発する「偽」を客観視し、それを倫理的に厳しく裁く歌」とした。さらに著者は本章での分析を通して、かの子の「自己愛」とは「自己凝視による自らへの批判」と表裏一体であると指摘し、かの子の文学性に従来からつきまわっていた「ナルシズム」の評価に対しての変更を迫る。続く「わが最終歌集」と『深見草』の位置」の章では、かの子が生前に残した四冊の歌集の最終歌集である『わが最終歌集』をそれまでの歌集との「歌語の使用頻度などをめぐる比較対照」の中で分析していき、さらに歿後に刊行された歌集である『深見草』についても検討を加えている。そこで見出された視点は「自我表出への放恣なまでの肯定が背景にある」「わが最終歌集」の歌の主調が「われ」の向日性を帯びた境涯を、家族や自然への愛着を通してうたつた」ところにあるというものであった。さらに、その傾向は『深見草』の「『統後の詠』にも引き継がれ、そのままかの子短歌の到達点といえる特質となつた」というのが著者の説である。ここまでの分析を通して「かの子の短歌の作風は一応の結末をみたということができよう」と著者が結論づけるように、この

章は「かの子短歌」の特質を大きくまとめた章として捉えることができるだろう。さらに「母から子への歌」、「母子叙情」の短歌、「晶子とかの子」のそれぞれの章では、「母親像」や「与謝野晶子」などの考察を通して「かの子短歌」の新しい側面を見出そうとしていて興味深い。

「第二篇 小説」では、最初の「過去世」「家壺」の章で「あらためてかの子の小説を通覧すると、登場人物の心機の転換において、没我ないし忘我、脱我といった契機が介されているのが重視される」と指摘し、その観点から分析が行われていく。特に、「老妓抄」「鮎」「生々流転」を論じた三章にその特色は顕著であり、それぞれ非常に読み応えのある論文として評価したい。例えば「老妓抄」論である。ここでは従来の研究史を丁寧^{ていねい}に分析し、そこで否定的な見方として上がった、老妓から援助を受ける若者・柏木の「発明」に対する「情熱の持続」を取り込んでいく。ここで著者は「同時代の「発明」をめぐる言説」という視座から、この小説を「時代相を補助線にした擬似家族小説として読み直し」ていき、そこから「発明考案の奨励された時代でもあった当時の、長山正太郎のような生き方、ないしはかの子の小説の、多くの登場人物の「途な生」を「読者に期待させる段階」であったことを見出した。そして、そのような「情況」に生きる登場人物の姿勢を描き出すことよって、「長期化が叫ばれていた日中戦争下における、同時代の国家的な「発明」への期待を複限化させた、園子の長期的な射程に立つ「憧憬」の継承への希望」を内包

する「老妓抄」の「主題性」を導き出したのである。また「生々流転」論では、従来の「仏教的な読解への還元」をあえて意識せず、登場人物である「蝶子の人間像について本文の表現から考察すること」を主眼に置くことで、小説の全体像を捉えている。ここでは「根元」を求め生きる蝶子の心情から「近代的自我という人界の「偽装」を脱して「根元の父母」的な無我の境涯へと遡及してゆく裏返しの教養小説、かの子文学流の反「ビルドダウンクス」ロマン」の側面をもつこの小説の特色が明らかにされた。

「第三篇 補説」では、かの子の旅行や読書体験などによって得た〈京都〉像から生成される作品について論じた「かの子文学と〈京都〉」や、かの子と接する機会をもつ人物との聞き書きを通して、人間・岡本かの子の印象像を記していく「岡本かの子の人物印象」などが収録されている。ここには、著者の緻密な実証主義を通して丁寧^{ていねい}に復元されていく〈岡本かの子〉の姿があり、新しい作家像を知るうえにおいて大変興味深かった。両書を併せた改訂版の刊行が今から待ち遠しい。

（おうふう 二〇一二年三月 二八二頁 本体価格七八〇〇円＋税）

（わたなべ・ひろふみ 佛教大学他兼任講師）